



『生涯学習とボランティア活動』

S A M 広島支部長
(株) ロジタント
代表取締役 吉田 祐起

「生涯学習」と「ボランティア活動」は今や高齢社会における代名詞的なテーマです。しかし、これら二つの言葉（行為）が個別の一人歩きをしています。

「健康・生きがいづくりアドバイザー」の役割を経営コンサルティングのジャンルに加えて活動する近年の私は、標題に関連する講演機会をよく与えられます。「目からウロコが落ちた感じデス！」と聴講者に共鳴されることがあるのです。

何で人間死ぬまで学ばねばならないの!? 何でボランティア活動をしなければならないの!? と別個に自問自答しましたら、納得のいく回答は期待できないと言いたいです。

人からバカにされたくない、尊敬されたいから勉強するんだ！ 定年で時間に余裕があるから何か人に喜ばれることをしてみたいので！ ってな単純な動機ではジレンマに陥るのがオチです。

かく言う私は半世紀に及ぶ現役人生で、くそマジメ過ぎるくらいに精出して（勉強して）それなりの技術革新や応分の「雇用責任」を成し遂げました。現在では、これまで得て（学んで）きたことを総合的に活かし、しかも新しいシステムの導入（規制緩和提言）に努力してきているだけに、

学んだことの実践とその成果や社会的貢献度はボランティア的であると確信するのです。

人間性を高め、人生を極める意義で学んだことを自身の中に閉じ込めず、外に発揮してこそ価値があり、その「実践の場」がボランティア活動である、というのが図式です。さらに意義あることは、そうしたボランティア（的）活動をする中で、新しい分野への知識欲やニーズがさらなる学習へと駆り立てる、というのが第二の図式です。

このサイクルこそが拙論の「生涯学習とボランティア活動」を表裏一体化し、あたかも「1本のあざなえる縄の如し」とするのです。

生涯学習は1965年にユネスコ会議で提言され、わが国の文部省生涯学習審議会で振興法として日の目を見たのは25年後の90年です。その一文が拙論を裏付けます。「ボランティア活動を生涯学習としてとらえ直す」と。それまでは別々のものとして考えられていた、というに等しいのです。

生涯学習は（も）欧米後追い思想と言えるでしょう。とは言いながら、かの米沢藩主・上杉鷹山の言葉は現代に生きています。“学びて思わざればすなわち暗し。学問の本意は実践にあり”と。